AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム（2005）６巻１号:71～78.

大学と地域連携による草の根的な実践活動「東神楽町との連携事例」―実習室活用による家庭看護講座を開催して―

藤井智子、杉山さちよ、今野保子、北村久美子

旭川医科大学研究フォーラム 6(1) ：71～78，2005

依頼稿

大学と地域連携による草の根的な実践活動「東神楽町との連携事例」
── 実習室活用による家庭看護講座を開催して ──

藤 井 智 子* 杉 山 さちよ* 今 野 保 子** 北 村 久美子*

【要　　旨】
大学と地域連携による家庭看護講座を行った。大学と地域の草の根的な連携事例における企画・実践・評価を通して、大学の地域貢献における役割を考える機会となった。

キーワード　大学と地域連携　　家庭看護講座

1．はじめに

看護系大学は、地域が抱える看護職全体の質の向上と看護サービスの質の充実に貢献しなければならない。そのためには、大学は地域社会の看護職に生涯学習の機会を提供したり、現場の実践者と連携を深めながら看護学研究の活性化を図ることが必要である。そして、特に、重要なのは地域社会にとって、存在価値のある大学を目指すことである。社会から隔離された閉鎖社会にとどまらず、地域社会との結びつきを強め社会に貢献しているかについて、常に、自問自答することに心がけたいと感ずるところである。それは、学生が地域の保健・福祉など関連の場での実習をとおして、多くの人々から多大な影響を受け成長していることを日々実感するからである。ことに、地域保健看護学における大学教育は、地域と大学の連携・協働によって成立していると言っても過言ではない。

そこで、大学と地域の連携・協働により老人保健法に基づく保健師活動を実践する機会を得たので、今回はその過程をとりまとめて報告するものである。

2．東神楽町家庭看護講座の企画・実施・評価

1）地区の概況および地区のニーズ

東神楽町は、人口9000人余りの都市型農村である。平成15年度７月現在の介護認定者311人のうち、27.3％（85人）が脳卒中によるものであった。高齢化指数（65才以上の人口の占める割合）は、18.8％と上川管内の他町と比較して低いが、核家族化が進む中では、家庭での介護力も高齢化傾向にある。家庭看護に関して、自宅で無理のない介護をしたいというご家族、介護体験を生かしたい、いざという時のために知っておきたいなど様々なニーズが住民のなかにあった。

2）企　画

(1) 東神楽町保健師との打ち合わせ

平成16年９月22日に北村が、平成10年以降学生の実習機関として毎年ご指導頂いている東神楽町保健師のメールを受けた。その主旨は、学生の実習レポートへのコメントと、東神楽町家庭看護講習会を旭川医科大学看護学科の実習室での開催は可能かどうかの問い合わせであった。即、総務課担当者に主旨、会場使用ならびに費用などを含め連絡相談しながら進めた。その後、開催準備から終了まで東神楽町保健師と約15回に及ぶメール、電話、ファックス、また打ち合わせ会議、リハーサルをとおして企画調整を行った。受講者の背景は、日赤奉仕団員、保健生活推進員、女性ボランティアの方々10名であり、テーマ、目的、目標、留意点は次のとおりとした。

*旭川医科大学　看護学科　地域保健看護学
**東神楽町役場

(2) テーマ・目的・留意点

ア．テーマ　家庭看護の基本「看護・介護を無理なく行うための技術の実際」
－移動介助を中心として－

イ．目　的　家庭での介護を無理なく安全に行うための基本技術を学び、災害時での虚弱者や高齢者などへの対応に生かす

ウ．目　標　① 家庭での介護を無理なく安全に行うための技術を学ぶ
② 自立を促すための（生活拡大）介護者の姿勢、役割を理解する。

エ．留意点　① 本人の持っている力を発揮できるような関わりが、無理なく安全な介護につながるという意識、考え方ができる。
② 受講者一人一人が技術を実践することがでる。
③ 満足感が得られるようにする。
④ 保存して頂けるようなわかりやすい受講生用テキストを作成する。

(3) 受講生用テキスト

平成16年度
東 神 楽 町 家 庭 看 護 講 座
旭 川 医 科 大 学 派 遣 講 座

受講者用テキスト
『家 庭 介 護 の 基 本 に つ い て』
― 移動動作を中心に ―

と　き　　平成17年２月22日(火)
10:00～12:00
ところ　　旭川医科大学医学部看護学科　実習室

■主　催■
日赤奉仕団東神楽文区・東神楽町
旭 川 医 科 大 学

3）実　施

(1) 平成16年度「家庭看護講座」実施要項

平成16年度『家庭看護講座』実施要領
主催：日赤奉仕団東神楽分区・東神楽町

1．目　　的
家庭での介護をむりなく安全に行うための技術を学ぶ。
災害時での虚弱者や高齢者等への対応にも生かす。

2．実　　施
平成17年2月22日(火) 10:00～12:00

3．場　　所
旭川医科大学医学部看護学科
地域保健看護学実習室（６階）

4．参加予定数
20～30名

5．内　　容
1）集合（改善センター）　9：00
出欠の確認、名札の配布、自己紹介
2）あいさつ　講師紹介　10：00～10：05
3）講義・実習　10：05～11：45
『家庭介護について ― 移動動作を中心に』

(2) 東神楽町家庭看護講座　計画案

日 時 参加者	平成 17 年 2 月 22 日(火)120 分 東神楽町一般住民　20～30 人	役割	東神楽町　今野主幹（総合司会、資料印刷、） 旭川医大　北村教授（講義、技術デモンストレーション、個人指導） 藤井講師（技術デモンストレーション、個人指導） 杉山助手（個人指導）

テーマ・各ねらい

家庭看護の基本　「看護・介護を無理なく行うための技術の実際」～移動介助を中心として～

○講義―自立を促す介護とは　要介護者の力を引き出すには‥
　脳と体を動かそう
　冷たいと思われても、最低限の介護をしよう

○介護技術―人間の自然な動きを利用した技術を学ぶ。
　基礎編：水平移動･起きる･立つ･座る･車椅子への移動の基本動作を理解し、介護方法をデモンストレーションと実践で学ぶ。(ベッドと布団)
　応用編：家庭での様々な介護場面を体験する。
　　→食事・入浴・排泄・車椅子移動

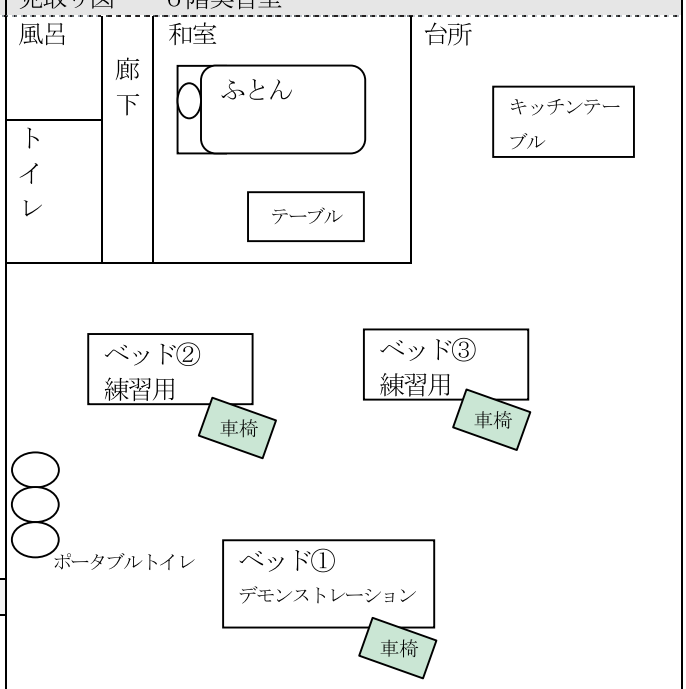
＊難しいイメージを無くす。

準備物品

ベッド　3つ　　車椅子　3つ　　ふとん一組
ポータブルトイレ　数個

準備日程―前日　　配布資料作成：2/18まで

見取り図　6階実習室



参加者を3つのグループに分け練習してもらう。

時間配分	学習項目	学習内容	留意点・補足説明
導入 5 分 （今野）	あいさつ 講師紹介	本日の流れについて説明する。 各講師、あいさつと自己紹介	テキストの配布
展開 1 20 分 （北村）	講義	「自立を促す介護とは」 ① 身だしなみ、食事、トイレは可能な限り自力で ② 介護量を減らし、自立への道を開く ③ 本人の身になって ④ 移動（歩行）の意義 ⑤ 自立を促すことば ⑥ 家庭内事故、転倒の原因	わかりやすく事例を挙げながら伝える。 介護者の姿勢､態度が自立を促すことに深い関係があることを考える機会とする。

展開２ 介護技術 30 分 （藤井）	基礎編 １普段の動き ①起きる ②立つ ③座る	●人間はどんな動きをしているのかを観察する。 ①起きる 普段の寝起きをやってもらう。→楽な起き方である →寝返りをして起きること、頭の動きが曲線を描くことを確認 介助：寝返りを助ける最低限の動きを見せる。 ②立つ 普段の椅子から立ちあがる動作をやってもらう。 →足を引く・頭が前傾する・膝より前傾したところでお尻が動くことを確認 介助：足を引かせ前傾するよう引っ張る。 ③座る 斜めに椅子を確認し、手で捕まり頭を前傾させ、お尻を突き出し座る。 介助：椅子の場所を知らせ捕まるところを指示する。 前屈みにさせてその下に潜り込む感じ	人の自然な動きをよく観察する。 その動きを助けることが介助。 介護を受ける人の力を引き出す・協力してもらうことが自立につながること伝える。どう動かすかではなくどう動いてもらうか・ 声かけ・コミュニケーションも重要。 動きを考慮しないと介助者に無理がかかり、腰を痛めることを伝える。 お互いに安全・安楽が大事。
	２基礎技術 ①水平移動 ②ベッドの端に座る （寝返り→半座位） ③ベッドから車椅子に移動する。 ④ふとんからの起きあがり ⑤車椅子の動かし方	●基本的な５つの技術を、デモンストレーションし、各自練習。 ①デモンストレーション 上半身の移動・下半身の移動 ②デモンストレーション－資料に沿って 両膝を立たせる。膝を左側に倒し、寝返りを助ける。 肩を支えながら両足をベッドの下におろす。 左側の肘をつけて力をいれてもらい上半身をおこす。 首から肩に手を回し前に曲線を描くように起こす。 ③デモンストレーション－資料に沿って 車椅子に移乗するまでの動きとして①立つ②回る③座るという３つの動きがある。この動きを介助し、車椅子移乗を行う。 ④デモンストレーション－資料に沿って ふとんからの起きあがりも自然な動きを観察する。 ベッドから起きるよりも筋力を使う。ふとんは自立を促す。 日常では何につかまるとよいか考える。 ⑤デモンストレーション－資料に沿って 車椅子の名称・ブレーキ・ステッピングバーの説明をする。 車椅子に乗り、実習室を巡回 段差の体験―ステッピングバーを踏む 坂道の体験―後ろ向き	参加者同士がペアになり、介護する方・される方両方体験。学び会う機会とする。 帯ひもを使う場合も提示する。 ＊練習が一段落したら・・車椅子介助へ進むことを伝える。
展開３ 練習 20 分	応用編 展開２で学んだことを何回か練習する。	●場面設定―日常生活の場面をいくつか想定 各グループ、それぞれの場所で練習する。 １ベッド上の起きあがり ２ベッドから車椅子・トイレ(車椅子からベッド、トイレ) ３布団での立ち上がり ４ソファからの立ち上がり、座り ５車椅子の介助、移動の介助	各講師、巡回し、個人指導する。
まとめ ５分 （今野）	質問 情報交換 交流の場 閉会	わからないこと、お互いの介護体験、悩み、困っていることなど情報交換し、交流の場を設定 アンケートの記入	受講生、スタッフが車座になる。

(3)　講座実施風景

東神楽町　今野主幹

ふとんの上での技術指導

講義のようす（北村教授）

交流のようす（杉山助手）

ベッド上での技術のデモンストレーション（藤井講師）

車椅子の介助のようす

4）評　価

(1)　終了後アンケート結果

(i)　受講の動機

表 4　受講の動機　（複数回答）

理　　由	人
今回のテーマに関心があったから	6
日頃から学習したいと思ったから	4
友人・知人に誘われて	1
合　　計	11

(ii)　本講座の感想

ア．A講義『自立を促す介護とは』

表 5　講義の内容について

	人
よく理解できた	6
理解できた	4
あまり理解できなかった	0
理解できなかった	0
合　　計	10

表 6　自立を促す介護者の役割について

	人
よく理解できた	6
理解できた	4
あまり理解できなかった	0
理解できなかった	0
合　　計	10

イ．B実技『家庭での介護を無理なく安全に行うための技術』

表 7　実技の内容について

	人
とてもわかりやすかった	6
わかりやすかった	4
あまりわからなかった	0
難しかった	0
合　　計	10

(iii)　本講座の満足度

表 8　本講座の満足度

	人
とても満足	4
満　足	6
やや不満	0
不　満	0
合　　計	10

(iv)　日程・場所について

表 9　日程・場所について

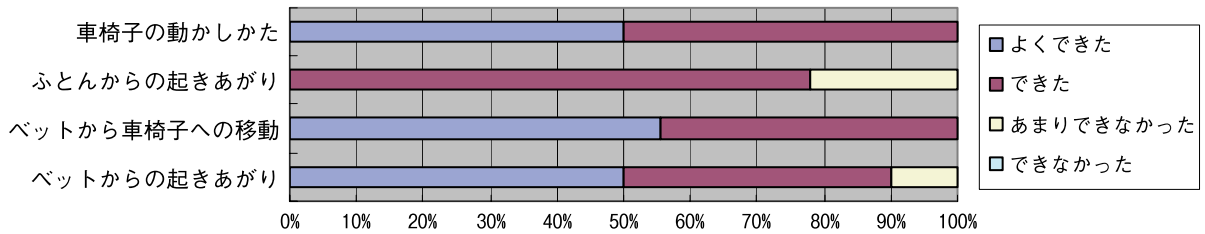
	適当である	適当でない	合計	備　　考
時 間 帯	9	0	9	
実施時間	8	1	9	短　い　　1人
実施時期	8	1	9	他の時期がよい 1人 時期の明示はなし
場　　所	9	0	9	

(v)　意見・希望

表10　意見・希望　（自由記載）

時々、受けてみたいです
心の介護・・・ただきいてあげるだけのお話を聞きたく思います。
とても親切に説明して頂きわかりやすかった。楽しくできました。
少人数なので、各自実技を時間をかけてすることができて大変よかった。
わかりやすかった。忘れないようにしたいです。
大変わかりやすかったです。
初めて参加させて頂きましたが良かったと思っています。
次回もありましたら参加させていただきたいと思います。
大変勉強になりました。ありがとうございました。
介護とは”自立を促す”ことであることがわかりよかったです。手とり足とりやってしまうところでした。
またあれば受講したいと思います。
車椅子を動かすだけでも大変なのがよくわかった。

図 1



⑵ 全体のまとめ

今回の家庭看護講座は、地域と大学との綿密な協働により看護学科６階実習室で開催することができた。車椅子、ベッド、布団など各種教材の活用ができ、スタッフの数も多いことにより受講生に濃密なサービスを提供できるよい機会となった。２月の厳寒期で欠席者がいたのが残念であったが、反面少人数のため介護の実技指導をていねいに行うことができ、中身の濃い講座であった。これまでの講座では多人数のため、受講者は見学している時間が多く、実際に体験することが少なかったため不満足に終わることがしばしばであった。また、どうしても介護の実技指導に重点をおきすぎると、介護の際に直面しやすい介護者の悩みなどにふれる時間をもつことがでなかったと思われる。

今回の講座における、無理のない介護のために、介護者の力を上手に生かすというねらいは、導入部の講義、また、介護の実技指導の中で受講者には十分理解できたようにアンケート結果から受け止めることができる。受講者は、新興住宅地であるひじり野地区から農村地区の方で年齢も40～60才代の方であり、様々な講座やサークル活動にも積極的な方ばかりであった。受講者の方々とは他の講座でも出会う機会があるので今回の講座のフォローアップをしていくつもりである。

次回については、つぎの点を考慮して準備することとする。

① 事前に受講者の参加動機、介護体験の有無、介護上の悩みなどニーズ把握をする。
② 講義は２回に分け、内容を精選し講義の意図が伝わるように計画案を整理する。
③ 時間は平日が参加しやすいため２時間くらいがよい。
④ 受講者数は20名程度が望ましい。
⑤ 受講者間の体験交換など、交流ができる時間を設けることとする。

おわりに

地域と大学が連携・協働して行った家庭看護講座の企画、実施、評価に至るプロセスをとおして、私たち、看護実践者としての能力向上の再訓練になったことは否めない。同時に毎年、学生が大学周辺の町での地域保健看護学実習で町民に健康教育活動を必ず実践させて頂いているがその学生の教育をしっかり振り返る機会となった。

また、東神楽町の町民との交流をとおして次のような結論を得た。

「健康教育とは、決して知っている者が、知らない者に情報を伝えるというものではない。それは、見識を伝え合うことであり、分かち合える人間性の探求である。」

草の根の地域連携は、自己の視野を広げてくれるまたとないチャンスであることに一同気がついた。今回の体験をとおして大学の地域貢献のあり方とは何かを考える機会となり、久しぶりに充実感に満ちた汗を流した。

最後に、東神楽町の皆様をはじめ、ご協力頂いた各関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

旭川医科大学研究フォーラム 6(1) ：71～78，2005

"Collaboration Cases with Higashi Kagura-Cho", Practical Activities through the collaboration with Region and College in a grassroots manner Review of a Home Nursing Course Utilizing Practice Rooms

FUJII Tomoko*, and SUGIYAMA Sachiyo*, and KONNO Yasuko**, and KITAMURA Kumiko*

Summary

A home nursing course was held through a collaboration between a local region and a college. It became an opportunity for us to consider the role that colleges play in contributing to local regions through projects, practice and evaluations in a case of grassroots collaboration with the region and a college.

Key words Region/ College collaboration, home nursing course

*Asahikawa Medical College, Department of Nursing, Community Health Nursing
**Higashi Kagura-Cho Town Office